

愛する人へ

神崎悠依

考えてみれば、誰かにお弁当を残されたのは、たぶん初めてだったのだ。

奈津がテニスクラブに通っていた六年間、毎週のように持たせた昼食は一度も残されはしなかった。それ自体もしかしてほかの家庭なら褒められることなのかもしれないが、比べる術もないのだからわからない。奈津は小さいころから怪獣みたいに食欲旺盛だったから、子供用のお弁当箱の中でも一番大きいやついっぱいにご飯を詰めて、それがきれいに返却されるのも当然すぎるくらい当然のことだったのだ。

それなのに。いま目の前にあるのは何なんだろう。さつきほどいた赤いハンカチの中で、いつも通りの今朝いつもと同じように作ったお弁当が、ほとんど手つかずの状態で鎮座している。私は夕飯の食材が詰まったエコバッグをかたわらに置いたまま、ばかみたいにぼうっとしていた。

ピッポウ、と壁掛け時計が五時を告げた。夕飯を作らなきや。反射的に立ち上がってキッチンへ向かう。その

ままにしておいても仕方がないので、残されたお弁当を流しの隅の三角コーナーに捨てる。どさどさと落ちていく卵焼きやウインナーが、記憶の底の一瞬を引っかける。

もう二十年以上も前の、一人暮らしを始めた日。料理らしい料理をしたことがなくても肉じゃがなんか簡単だと張り切って、ふたを開けてみたら焦げついていて。二十四時間営業のコンビニに自転車を走らせた春の夜。そのとき捨てた黒焦げのじゃがいもが現在に重なる。あの、砂を噛み締めるような気持ち。こんな女、誰にも必要とされないんじゃないかという不安。料理ならあるときよりも断然上達したはずなのに。

ひとつ首を振って掘り返しかけた記憶を振り払う。六時まで夕飯をこしらえておくことのほうがいまの私には大事なのだから。

「そんなにシヨック受けるう？」

ぐいっとお茶を飲みほした勢いそのまま真琴さんは言った。パートがまとめて休憩を取っていいと言われるのは、駅前のパン屋には珍しい。

「シヨックというほどじゃないんですよ。何ていうか、むなしというか、やるせないというか」

「それシヨックじゃん。まあ私が旦那にソレやられたら、はっ倒してやるけどさ」

正確には「元」がつく旦那さんと、真琴さんはもうと

つくの昔に別れているけど、こんなふうにはすぐネタにしているからと笑う。パートに入り立てのころは反応に困ったものだった。

「なっちゃんいくつだっけ」

「中一」

「でしょお。ちょうどそれくらいだよ反抗期って。色々あるんじゃない、中学生にも。それで、本人はなんて？」
聞かれて、廃棄品のパンを拝借していた手がはたと止まる。真琴さんがまさか、と呆れた顔になる。

「聞いてないの？」

私は曖昧に笑って、小さく頷いた。

「何でさ。叱ったりもしてない？もしかしたら体調が悪かったってこともあるんじゃないの」

本当にどうしてだろう。母親だったら真っ先に聞くべきだったのに。あの土曜日の夜。いつものように食卓を三人で囲んで、さあ聞こうかって思った。だけど奈津が毎週欠かさず観ているアニメ番組がちょうど始まって、タイミングを失っちゃったんだ。追及する気は、何だかするっと抜けてった。

「そうですね……ちゃんと聞いてみようかな」

「絶対そうすべき！報告してね。あ、店長呼んでる」

「私行きます。もう食べ終わったから」

「ごめんねってジェスチャーで告げる真琴さんにひらひらと手を振り返して、パンの陳列に向かう。焼き上がっ

たばかりのパンほど香ばしいものはない。これが好きだから真琴さんは、フリーライターの片手間にパン屋のパート、なんてよくわからない生活を送っているらしい。本当にやりたいのはライターのほうで、旦那さんと別れたのもそれがきっかけだったと聞いている。仕事に生きる女。そんな言葉が似合う。私とは、違って。

聞こう聞こうと思いつながら、タイミングを逃したことにもう一度挑戦するのはエネルギーが要る。もしかして何でもなかったんじゃないかしら。そうじゃなきゃ、何かの間違いだったんじゃないかしら。

私はきつと何でもないことにしてしまいたかったのだ。ところが、宣告は向こうから不意にあった。

「お母さん、明日のお弁当いらない」

そのとき、冷やりとしたものが背中を伝った。

「だって明日もテニス部の練習でしょ？お弁当なくてどうするの」

「買うからお金ちょうだい」

「どうして。そういえば——先週もお弁当まるまる残してたけど、お腹の具合でも悪いの」

奈津は冬でも日焼けが抜けない小麦色の顔を、不機嫌そうに歪めた。

「だって、お母さんのお弁当ぎゅうぎゅうなんだもん。こないだ言われたんだから、大食いだねって」

「はあ？ 誰に」

「……テニス部の人」

「それだけ？」

それだけで、まるまる全部残したっていうの。人がせつかく作ったものを。

しかし私の反応が、奈津は気に食わなかったらしい。

「それだけってひどすぎ！ すっごい恥ずかしかつたんだから、明日は絶対自家弁いらないから、買い弁じゃなきゃあたし餓死してやるからっ」

子供らしい早口で言い切ると、奈津は寝室の扉を力任せに閉めた。残された私の足もとから、不意にあの虚無感がひたひたと忍び寄ってくる。

翌朝、餓死されては困るから、買い物に行くためにいつもより早く奈津を起こした。奈津はぎりぎりまで寝ている上に寝起きが悪い。どうして起こしてくれなかったの、起こしたよ、起こしてないじゃん、という散々繰り返したやり取りを今朝もする。そのくせ奈津は、時間が迫っているというのにテレビの占いで自分の星座が出てくるまで粘ろうとする。どうせコンビニで時間を食うのだから、テレビの前から無理やり引っぺがして車に乗せた。

ぶつくさ文句を言っていたけど、コンビニに行くとき選ぶほうに興味移った。

「どうしよう、鮭がいいかな、明太子かなあ」

「あんた、こっちのお弁当のほうがいいんじゃないの」

「やだ。パンとおにぎりだけでいい」

「だってそれじゃあんたには足りないでしょ」

奈津はむっとなった。

「うるさいなあ普通に足りるってば。ほっといて！」

私は黙った。

会計を済ませるころには予想通り集合時間が迫っていた。県道を飛ばしに飛ばしてグラウンドの裏に車をつける。奈津は無言で車を降り、スーパリーの袋を振り回して駆けて行った。何だかいつもよりどっと疲れて朝が始まった。

どんなに億劫でも仕事には出なければならぬし、真琴さんが休みで話を聞いてもらえなくても帰ったら夕飯を作っておかねばならない。

土曜日だから勇司の帰宅は早いはずだった。ところがいつもならとつくに帰っているはずの時間になっても帰ってこない。携帯に連絡を入れても電源が切れている。

「お母さん、お腹すいた」

「うん、でもお父さんが帰ってこないとね」

「先に食べちゃおうよ。あたしもうお腹減って死にそう」

私は思い至った。

「やっぱりお昼、パンとおにぎりじゃ足りなかったんで

しよう」

きつと凶星だろくに、奈津はまた不機嫌な顔になった。
「違うもん。練習きつくて超疲れたんだもん」

子供を空腹にしておくわけにもいかないし、先に食べさせることにした。お弁当論争にうんざりしていたこともある。私はそれほど空腹は感じていなかった。奈津は普段に一緒に食卓につきながら口をつけなかった。奈津は普段にも増して豪快な食べっぷりをしてるが、ホワイトシチューのニンジンを用意にはじいている。またか。私はため息をつく。

「ちゃんとニンジンも食べなさいよ」

「やだ、嫌い。大きいんだもん」

「ニンジンも食べられないで、大人になったらやってけないよ」

「みじん切りなら食べられるってば。お母さん最近ちよつとうるさすぎ」

何よ、ニンジンのことはいつも言ってるじゃない。それに肘だつてついて食べて、何回言っても直らないからじゃないの。最近とかじゃないのに。私はいつも通りにしているだけなのに。

何か言おうとすると、奈津は手早く最後の一口を飲み込んで食器を積み上げ、部屋に引っ込んだ。

「ごちそうさまくらい言いなさい！」

叫ぶつもりはなかった。しかし誰もいないダイニングが

一層の静寂を返すだけに、自分が声を張り上げたのだと自覚させられる。何かがおかしい。卓上のポテトサラダや鮭のムニエルが無言で何かを訴えかけてくる。

脱力して、玄関の鍵の開く音がするまでテーブルに突っ伏していた。顔を上げて時計を見ると、十一時を回っていた。奈津はお風呂に入ったのだろうか。

「たぐいまあ。あれっ、まだご飯食べてなかったの」

勇司がネクタイを緩めつつやってきた。その顔がほんの少し、赤い。

「まだって、待ってたんじゃない。遅くなるなら言ってくればよかったのに」

「え、先週言ったじゃんか。今日は上司と二人だけで飲んでくるから遅くなるって」

「嘘。聞いてないよ」

「あれー、言ったと思うけどなあ」

勇司は首を捻りつつ、コートと背広をソファの背に掛けるや否や倒れ込む。

「携帯だつて繋がらないし」

「充電切れちゃってさ、俺も参ったよ、タクシー捕まらないし。ちよつと悪いけど寝かせてくれよ」

「ご飯は？」

「いらぬよ。疲れてるんだ、あの上司、話が長くてさ……」

言い終わらないうちにいびきが聞こえてきた。アルコ

ールのせいで高らかないびき。何だか無性に腹が立つ。ふん。風邪でも引いてしまえばいいのに。そう思っているといびきの合間に盛大なくしゃみが入った。泣きそうになりながら毛布を持ってきて掛けてやる。背広だつて皺くちやになっちゃうから。そうなることを祈りながらコートも背広も拾い上げ、ハンガーに掛ける。掛け終わってきれいに整えた背広を目の前になると、どうにも抑えきれない凶暴な衝動が湧き上がってくる。不意に力いっばい手を振り払った。カーペットの上に音もなくハンガーが転がる。いつの間に、私は肩で息をしている。

勇司が付き合いで遅くなるなんていままでだつてあったことだ。それがどうして今日はこんなに許せない。がんじがらめになつてみたいに。身動きできなくて苦しいのに叫ぶ言葉を知らない。いつの間に、こんなふうになつてしまつたんだろう。

翌朝目覚めると、夜のうちにベッドへ入ってきたらしく勇司が隣で寝ていた。ややだるい気がするが、パートに出掛けていかなくはならない。まだ温もりの中みたい誘惑に耐え、思い切つて蒲団を剥ぐ。

休日の朝六時に起きる者などこの家には私以外にいない。一人でこたつをつけて、昨日のシチューを温める。フランスパンを刻む。空腹ではあるが朝からそんなに食べられるものでもない。暖まり切らないこたつに顔以外

の全身を突っ込んで、テレビから流れる天気予報を聞きながら、パンにシチューをつけて黙々と咀嚼する。身支度を整え、お昼にシチューを温めて食べるように置手紙をしてからマンションを出る。

まだ日も昇らず誰も見当たらない街並みを、マーチでのろのろと通り過ぎる。

ラジオをかけながら耳はそれを聴いていない。いらない、きらい、うるさい、いらぬ。色んな言葉が誰かの声で再生されている。

その日の仕事は忙しくて残業扱いになり、帰りに用事を済ませていたら、予想外の時間になつてしまった。

夕飯は何にしようとしたんだっけと、くたくたの頭で考える。卵があつたから親子丼がいいかな、いやでも火曜日もそれじゃなかつたかしら。そうだ冷凍庫に挽き肉があるからオムレツにしよう。ニンジンのみじん切りにしてやつて、コンソメを切らしてだから味噌汁でもいいや。勇司はグルメつてわけじゃないからちよつとくらい和洋折衷でも怒らない。そしたら買わなきゃいけないものは味噌汁の具だけかな。ちよつとした付け合わせも出来合いのものを買ってしまおう、ゆっくり作っている時間もないんだ。買い物で済ませたらさつさと帰つて何よりも先に夕飯を作る。

大型スーパーの駐車場で、そこまでの手順を思い描い

た私は車のドアを開けることができなくなった。その、途方もないように思える手順。どうしてこんなに途方もなく感じるんだろう。いままで何千回、何万回だって繰り返してきたはずなのに、どうして今日はそれができない。すべてを投げ出してマーチのエンジンをかけてどこかずっと遠くへ逃げ出してしまいたいのに、それをする気力すら湧いてこない。

携帯を取り出して、かじかみ始めた手でメールを打つ。仕事が遅くなっちゃったから、出前取ってくれるかな。わかった、という返事はすぐに来た。わかった。たった一言のディスプレイが滲む。そんな簡単な一言で承諾されてしまった私が、たまらない。どうにもたまらない。

翌日、勇司を見送り奈津を車で送ったあとで、何かを忘れていることに気がついた。ごみ出しだ。燃えるごみの日は今日と木曜日だが、とっくに収集車は行ってしまっているだろう。もういいや、と思う。仕事が休みなのが何より嬉しい。一人でいられることにほっとする。

溜まっていたあれこれをしたり、真琴さんに借りた本を読んだりして自分の時間を過ごす。お腹がすいたら冷蔵庫をのぞき、有り合わせのもので簡単な昼食を作る。ベーコンエッグとしらすご飯、残っていたポテトサラダ。自分のためのご飯って信じられないくらい簡単だ。食器もさっさと洗って片付けられる。

掃除機をかけようかと考えて、面倒になった。確か真琴さんも今日はシフトが入ってなかったはず。携帯を開く。ほんの少しのお茶だけでもできればいい。

「一日二日くらい休んじやえばいいのよ、主婦なんて」
豪快に笑って、真琴さんはホットココアを啜る。

「いい……ですか」

私は後ろめたさが邪魔して割り切ることができない。

「いーのいーの。ホント凄いなと思うよ主婦って。私は誰かに尽くすとか、そういうことできないもん」

ふと目を上げると、真琴さんが濃い隈の浮かんだ目を細めてこちらを見ていた。居た堪れなくなつて俯く。時々真琴さんのほうが羨ましくなるだなんて、きっと私は言っていない。

「それで結局、どうしてお弁当は残したんだって？」

私が教えてほしいくらいだ。

「大食いだね、って言われたのが嫌だったんですって」

「へえ。それだけ？」

「でしよう？ 私もおんなじ反応したら、機嫌悪くなっちゃって、もう最悪」

真琴さんが少し考え込んでいる。

「誰に言われたのかなあ」

「テニス部の人だって」

「男の子じゃないの」

それは意外な一言だった。真琴さんが続けた言葉は、いつまでも私の耳に残った。

「反抗期って、思春期でもあるんだよね。ま、これは私の推測だし、もっと別の何かがあるのかもねえ。私たちには想像もつかないようなこと」

これから編集と会うという真琴さんと別れ、一人の家に戻ってきた。奈津のお弁当のことを考えながらも、三時を回ると自然に夕飯のことが頭をよぎる。今日は休みなのだから、ゆっくり買い物したいならもうそろそろ出てもいい。休みなんだから、少し凝ったものを作るべきだろうか。

だけどそこまで考えると、やっぱり足が動こうとしないう。もういいか、外食で。そう決めてしまえば驚くほど気持ちが楽になる。それはどこか、諦めに似ている。

こういうの家事放棄って言うのかな。私はだめな妻だったのかしら。十年以上もやってきたことが、どうしていまになってこんなにも億劫なのだろう。真琴さん、私は全然、凄くなんかない。

虚ろに眺めていた部屋の中で、ふと目に留まるものがあった。何だろうとその辺りに視線を戻し、こたつから抜け出て四つん這いで近づく。本棚の一番下、ほとんど読まれることのない本のあいだの色褪せた薄い背表紙。何だっけ、何だっけ。なぜか気になってぎゅうぎゅうに

詰まった棚から無理やり引き出す。表紙を見た一瞬に数々の記憶が胸によみがえる。

昔よくお世話になったお菓子のレシピだ。学生のころ使っていたものに愛着が湧いて、お菓子メーカーに就職するときは、そこで出会った勇司と結婚するときも、引越しのたびに一緒に持ってきたのだった。開いてみれば、長年使い込んでいたためにぼろぼろのページの端から、そのとき作ったお菓子の香りと思いが匂い立つ。

付き合いだして初めてのバレンタインにはガトーショコラを焼いた。勇司は甘いものが苦手なくせに、おいしいおいしい、君はいいお嫁さんになる、って真顔で感謝を述べてくれた。勇司と出会うまでにお付き合いをした数少ない男の子たちにも、若い私は想いを伝えるときかならずお菓子を作った。何度となくお世話になって、そのたびに私の甘酸っぱい感情を積み重ねてきたレシピ。子育てをしながら働き始め、いつしかお菓子なんか作らなくなると、すっかり存在を忘れていた。

ふらりと立ち上がる。キッチンの戸棚を開けて、小麦粉やふくらし粉や砂糖があるのを確かめる。冷蔵庫には卵とバター。型もふるいも大きめのボウルも、こっちの棚じゃなかったかな。実家から使い慣れたものを持ってきていたはず。あるある。できる。一番簡単なスポンジケーキが。

レシピの最初のページをテーブルに広げる。もう何度

となく作ったレシピだから手順はとづくに覚えているけど、これは儀式みたいなものだ。お菓子を作るときの、あのまっさらな気持ち呼び起こすための。

C Dコンボを持ち出してきて、お気に入りの曲を流す。若い私とおんなじように。オーブンを百八十度にセットして、型にクッキングシートを敷いておく。

材料を量る。小麦粉とふくらし粉をふるう。ボウルに卵を割り、勇司のために少し減らした砂糖を加える。湯煎にかけながらハンドミキサーで泡立てる。ひたすら、ただひたすら。この作業が一番長い。ミキサーの音にかき消されないようコンボの音量を上げ、とりとめのないことを考える。潰れてしまった初めてのケーキと、無言でそれを平らげた父。実家にいたとき母の日はマフィンの日だった。敬老の日は和風に栗蒸し羊羹。私の作ったお菓子を食べて、笑ってくれた人たち。奈津が小さいころは一緒にクッキーを作ったりもしたっけ。勇司はいちいちありがとかなんて言ってくれて。帰ってきたら彼は何て言うだろう。

とりとめのないことを考えているうちに、生地は白くふつくらしなものに変身している。勇司がどうしても疲れたとき、ぐっすり眠ってしまうためのブランデーを大さじ一杯拌借する。粉類を加え、ゴムベラに持ち替えて切るように混ぜる。このコツを覚えるまでに何度失敗したことか。気を抜くとペしゃんこな出来になってしまう

から慎重に。おいしいケーキを作りたい。ただひたすらそうなることだけを祈って。

最後に溶かしバターを混ぜ込んで、型に流し込む。だまもなくならかなクリーム色の生地。予熱が完了しているオーブンに、すばやくそれを入れる。時間は四十分。スタートボタンを押すときはいつだって、敬虔な祈りが胸にある。

腰を下ろして一息つく。きちんと作動しているオーブンの橙色の光を見ていると、立ち上がるという気になった。――まだ、間に合う。

時間を確認し、マーチのキーを取り上げる。

「ごちそうさま」

「なんか今日、豪華だったね」

好物のハンバーグを食べたせいかな奈津の機嫌がいい。

「たまにはね。明日からは質素だからね」

えー、と口を尖らせる。勇司は食後に一服している。出すなら今かな。私はさりげなさを装いながら、変に緊張している心臓を抑えつつ冷蔵庫へ向かう。ああそうだ、誰かに何かをあげるときの緊張ってこんな感じだった。どんな反応をされるかな。喜んでもらえるかな。

夕飯の材料とともに買ってきた生クリームと苺でデコレーションしただけの、素朴なケーキ。二人の反応は、口をぽかんと開けるだけだった。

「たまにはついでに、作ってみたんだけど、食べませんか」

「気恥ずかしくてなぜか敬語になった。奈津が目を丸くしている。」

「どうしたの？ 今日何の日だったっけ」

「何もなくても、作ってみたっていいじゃない」

「何もなくても。そう、特別な日じゃなくてもケーキを焼くなんて贅沢、しばらく忘れていたんだ。なんでもない日に焼いたケーキを、きつと私はずっとずっと食べてもらいたかった。」

切り分けているあいだ、戸惑っている二人の空気が伝わってくる。それでも目の前に置いてやると、フォークを手にもう一度いただきます、と言って食べ始めた。いただきます。さりげない一言が耳を打つ。私は二人が食べているのを眺める。それだけでよかった。しばらくして奈津がぼつりとおいしい、と言った。勇司は黙々とフォークを進めている。知っている、このペースは甘いものでも本当においしいと思ってくれているということ。長年見てきたから、知っている。

小さな食卓に食器の立てる温かな音が響いて、知らぬ間に私は深く息をしている。

洗濯物を畳んでから戻ると、勇司がキッチンに立っていた。奈津は寝たらしい。何をしているのかと覗き込む

前に、コーヒーの濃い香りが鼻をつく。

「珍しい」

「思わず呟くと勇司が苦笑した。」

「たまにはインスタントじゃないのが飲みたくなってる」
カップが二つ、テーブルに置かれた。ひとくち啜れば深い苦味が体を温める。

「ねえ」

私はふと心に浮かんだ願いを告げた。

「奈津が家を出て、あなたも会社を辞めたら、二人で小さな喫茶店をやらない」

勇司はカップから口を離し、閉じていた目を開けた。

「昔話してたっけなあ。俺がコーヒー淹れて、お前がお菓子作って。クラシックの流れる、レトロな感じのお店がいいよな。駅からちよつと離れて、隠れ家みたいな暗い店……」

覚えている。そこで静かに二人で年を取っていくことが、ささやかな私の夢だった。

「……明日もあの上司の小言、聞いてやるかあ」

勇司が大きく背伸びした。

「まだまだ、がんばんなきゃな。奈津の進学のためと、いつか物件借りられるくらいには」

二人が夢を覚えていた。私は肩の荷が下りた気がした。こんな穏やかな時間はケーキから生まれたんだと確信している。愛する人たちに喜んでもらいたい。それはきつ

と人の本能だ。私は日々の蓄積に押しつぶされて、そんな本能を忘れていた。けどもう大丈夫な気がする。そんなふうになったらまたケーキを焼けばいい。奈津のため。勇司のために。私のために。

義務でも見返りを求めてでもなんでもなくて、ただ喜んでもらいたい、そのために早起きもダイエットも料理もできる相手が、奈津にいとしい。その人のことを聞くときは、勇司のいないときにしよう。勇司はきつと、怒るか狼狽えるかしてしまおうだろうから。

「何笑ってるんだ？」
私は答えない。

ひそやかな夜に、愛する人たちの気配が息づいている。それがわかるのが嬉しくて幸せで、私は笑い続ける。